

書評

陳逢源氏著

『雨窓墨滴』

楊雲萍

著者の専門とされるは經濟の研究である。現に興南新聞の經濟部長の職にあり、己に『經濟問題の特質と批評』、『新經濟論』等の著作を持つて居られる。

然しながら又一面、氏は現在臺灣に數少いすぐれた漢詩人の一人である。(思へば、林南強、胡南溟、連雅堂、洪棄生、林少眉等の我々が誇り得る詩人たちは、前後して皆修文に赴いた。因みに十月の某雜誌で、林獻堂氏が質問に答へて、現在の臺灣の漢詩人に就いて陳べて居られるが、突如の返答であり、又速記の關係もあらうが、甚しく不備である。あげるべき人をあげずなど。ヘンネームを南都と擧す。本書の大部分は、詩人としての著者がものして發表された感想、隨筆、紀行文を多少修改して上梓されたものである。著

者自作の漢詩が、かなり數多く各篇の中に存録されて居る。

二十數篇の中、僕は「梁超と臺灣」、「許南英と落華生」及び「文化時論」の中の「忘却された臺灣研究」の三篇を最も興味深く讀んだ。「梁超と臺灣」の中に紹介されて居る梁氏の「海峽談」の一聯の詩は、單にそれ等が臺灣で、或ひは臺灣を味じた作品といふのみでなく、まことに著者が言はれる如く「不朽の名篇」であり、梁氏の詩作中、その最高を占めるべきものである。(これに就いては、己に陳衍がその著「石遺室詩話」の中で論じて居る。又梁氏の臺灣旅行は、臺灣文化上特筆すべきものがあふ。次の「許南英と落華生」の「落華生」は南英先生の子息許地山氏の別號で、著者と許氏父子の因縁はなつかしい限りである。「忘却された臺灣研究」の一編は、その言議が忘却されない事を祈る。

其の他、「梁超畫舫の情調」、「京都臺南の床しき」等の諸篇も著者の詩情と稿思を感じさせるものがあつてうれしく讀まれるのである。十八九年前、僕が未だ中學生の時代に、わが著者は己に偉大の筆を以

て臺灣文化の爲めに努力をされた。(今でも新カント學派の一異派西南ドイツ學派を紹介された一文を思ひ出す。當時僕は理のわからぬ「哲學少年」だつたので。其の後、星移り臺灣も變つたが、依然としてわが著者の筆眼よく、他かなるは、後學の一人として、まことに心強く敬祝に堪へないところである。壬午十月十四日記。(B六判百六十頁、臺灣藝術社刊、定價一圓五拾錢)

富田芳郎氏
『臺灣街の研究』
(東亞學第六輯の内)
陳紹啓

筆者富田氏は臺北帝大において地理學を講ずる人で、日本學術振興會の補助を得て目下臺灣街の調査研究中であり、本編はその概括的な彙報である。
所謂臺灣街は行政區劃上の市、街庄の街でなく、街の區劃内のタウソンと呼ぶにふさはしい小都市を指すものである。即ち一般の概念としての町で、臺灣における地方的な小都市型の市街地を指すのである。この

文獻紹介

- 紅樓夢偶事 (李騰嶽)
- 殊にその諸人物の器量疾病に就ての考察(臺灣醫學會雜誌四一ノ三、昭和一七年六月)
- 海南島黎族の一部に就いて(宮本延人(臺北帝國大學第一回海南島學術調査報告、昭和一七年八月))
- Seichi Iwao; Early Japanese Settlers in the Philippines, (Contemporary Japan, Vol. XI, Nos. 1-1, 1919)
- 行儀(金剛丈夫)
- (臺灣公報七ノ八、昭和七年八月)
- 大龍廟(立石鐵臣)
- (同前)
- 臺灣の結婚種々相(宮啟木)
- (同前)
- トンボ玉寸談(宮本延人)
- (臺灣公報三ノ八、昭和五年八月)
- 質辭閑話(江背梅)
- 櫻説その三(同前)
- 臺灣俗語對照(藍玉民)
- 雜對その二(同前)
- 試演會(萬達寺龍)

様な街が現在臺灣に五千六ある。元來あんまりパツとしない存在であつても、行政上の必要に基く調査があつて、科學的な討究は殆どなされてゐないのであるが、富田氏は之を各方面より組織的に分析し、一讀實に興味津たるものあり、この地に住む我等もそうであつたかと始めて啓發される處が多々あつた。

臺灣街は附近の村落地帯の商業的中心であり、大部分この村落民を相手とし、これに直接依存して成立つてゐる所謂鄉村依存都市である。従つて家屋店舗も、鄉村人の最も頻繁に通行する主要聯絡道路に沿ふて設けられ、街は細長い一本の街村をなすのが常である。もともと鄉村に依存してゐる爲、その盛衰隆退も鄉村の産業經濟如何によつて規定され、それ自體としてはしかし大規模な發展を上げ得るものではない。併しこの小市街が小工業都市、鐵山都市、宗教都市、保健都市、教育都市或ひは大都市の衛生都市に轉化した場合、もはや鄉村に依存するものでなく、間接的にはあるがより廣大な範圍に依存するものとなり、その發展も鄉村依存都市より更に一段と

展開することが出来るのである。

街の發展形態として明治型、大正型、昭和型をあげてゐられるのも興味深い。領臺前の街は南支那型であつたが、領臺後殆ど總て市區改正が行はれたので、もとの形が残つてゐるのは見當らない。併し明治時代に建設されたものは南支那型がまだ濃厚に繼承されてをり、現在でも南部臺灣の東港街や鳳山街において見ることが出来る。これが明治型である。大正の好景氣時代に市區改正と共に改築されたものが多く、街路の幅が廣くなり、上下水道も整備し、店舗も面目を一新して自ら一つの型が出来上つた。總赤煙瓦が多く、二階屋も多くなり、市街の中樞部には必ず停存脚がつくのがその特徴で、之が即ち大正型である。更に昭和の時代に入つて都市計画や空害の復興に際し新しい特徴が現れてゐる。概ね二階建て、壁は煉瓦積の表面を凝土で塗つたものもあるが、凝土造りが多くなり、大正型の赤煉瓦に對して色彩が全然異つてゐる。停存脚の幅は廣くなり一定する様になつた。之が昭和型である。

臺灣街は自然に深き根を下した多

數の臺灣の農、山、漁村生活と近代的な社會經濟生活との接觸面とも謂ふべきものである。生活の變遷、風俗の推移はこの臺灣街において素朴に、併し克明に表現されてゐる。ある意味において之は臺灣の社會生活の把握に對するキーポイントであり、この點から謂つても臺灣街の研究は重要である。著者が一旦も早く研究を完成されて公にせられんことを希望してゐるのである。(東亞學第六輯、日光書院發行、定價二圓)

受贈雜誌

- 北支(六、七、八、九、十月號)華北交通株式會社
- 太平洋(五、六、七、八、九、十月號)太平洋協會
- ひだびと(七、八、九、十月號)飛騨考古士協會
- 古美術(五、六、七、八、九、十月號)寶雲會
- 臺灣(七、八、九、十月號)其社
- 南方(七、八、九、十月號)南支調查會
- 旅と傳説(七、八、九、十月號)其社
- 臺灣公論(八、九、十月號)其社
- 文藝臺灣(八、九、十月號)其社
- 臺灣藝術(八、九、十月號)其社
- 山東文化(三、二、三、四、五)青島文化聯盟
- 臺大文學(七、二、三)臺大文學會

影戲に就て(臺灣地方行政八ノ八(昭和十七年八月))

○鹿港遊記(池田敏雄)

民俗的紀行文(同前)

○續鹿港遊記(池田敏雄)

(臺灣公論七ノ九、昭和七年九月)

○臺灣食物考(朱鏡)

愛玉凍、摺仔麵、伊麵、佛舍麵に就き(臺灣藝術三ノ九、昭和十七年九月)

○臺灣藝談(笑仙)

測字に就き(同前)

○池田敏雄、劉頌楨兩氏對談會

民俗に就て(同前)

○植民地統治と保甲制(中村哲)

保甲制と村落自治體、異民族統治策としての保甲制、臺灣に於ける保甲制の三章よりなる(臺灣時報二五ノ一〇、昭和十七年一月)

○龜と放生(吳槐)

(臺灣藝術三ノ一〇、昭和十七年一月)

○臺灣食物考(朱鏡)

和蘭豆、桌豎豆、烏魚、都督魚、麻虱目に就き(同前)

○臺灣藝談(蘇玉民)

臺灣俗語對句、數字の詩(同前)